

# 焼酎「球磨川」復興の証しに 霧島酒造が商標無償譲渡

2022年07月31日



大和一酒造元が今月発売した球磨焼酎「球磨川」と下田文仁社長

2020年7月の熊本豪雨で全壊した熊本県人吉市の球磨焼酎蔵元・大和一(やまといち)酒造元が今夏、新たな米焼酎を発売した。その名は「球磨川」。氾濫し甚大な爪痕を残した川と共にこれからも生きていくという思いを込めた。「球磨川」の商標を持っていた霧島酒造(都城市)が無償譲渡したことで実現した。

球磨川のほとりで明治時代から続く蔵元を継承し、1952年に創業した大和一酒造元。熊本豪雨では蔵の1階部分が完全に水没、6万リットルあった原酒の8割が濁流に流された。3代目の下田文仁社長(55)は「再開なんて考えられない惨状だった」と振り返る。

霧島酒造が商標を取得したのは、先代の江夏順吉氏(故人)が健在だった60年代。当時は熊本県にも生産拠点をもち、順吉氏はその道すがら人吉市をたびたび訪ねていたという。三男の江夏拓三専務(73)は「父が球磨川を眺め、『すごいね』と話す姿を覚えている。いつか同じ名の焼酎を造ろうと思っていたのだろう」と懐かしむ。実現はしなかったが、「父の思いはもちろん、全国的に知られる清流の商標は貴重」と保持し続けてきた。

下田社長が球磨川の名を冠した焼酎造りを思い立ったのは被害から1カ月が過ぎたころ。「何があっても球磨川は大切な存在。ここで再起する気持ちを表現したかった」。商標が業界最大手の手元にあることを知り、意を決し有償譲渡を願い出る。回答はすぐに届いた。「無償でお譲りします」。江夏専務によると、役員会が全会一致で即決した。商標は大和一酒造元など27社が加盟する球磨焼酎酒造組合が譲り受け、どの蔵も使えるようになった。

被災直後には組合に多額の寄付も贈った霧島酒造。江夏専務は「日本古来の焼酎や日本酒は今、缶酎ハイなど手軽なアルコール飲料との競争にさらされている。一緒に本格焼酎を盛り上げる仲間が苦しんでいる時は、これからもできることで協力したい」と語る。

清流をイメージした瑠璃色のボトルの「球磨川」が発売されたのは、災害から丸2年となった今月4日。下田社長は「多くの人の思いを裏切らないよう、球磨川の名に恥じない銘柄に育てていく」と誓う。仕込んだ一升瓶3千本分は残りわずかとなった。